

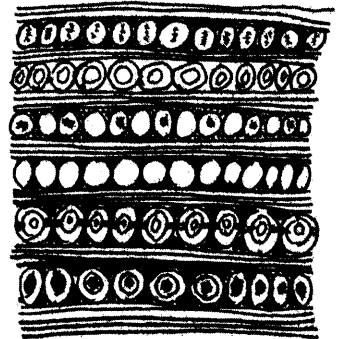
目標

津守 真

後向きに歩く

その子は、ごく小さいときから後向きに歩いた。学校のベランダの手すりに沿って後向きに歩くのを好んだ。庭の真中でも後向きに進むことが多く、その割には物にぶつからないうで方向を変えた。つまづくとひどく怒って大人にしがみつき、いつまでも機嫌がなおらなかった。

最近、学校から泊りがけの小旅行をしたとき、宿舎につくと、部屋の前の細長くつづくベランダを、手すりに沿って後向きに歩いた。はしまでゆくと次には前向きに走り、また後向きに歩くことをくり返した。ベランダの数段の階段も後向きにおりるのだが、決して振り向かずに何度ものぼり下りした。ときどき足をふみはずすと、ウエーと泣いて私にしがみつき、安定を求めた。再び足を地面におろすとき、そろそろと注意深くおりる。私は宿舎に入る前の小一時間をこの子と過ごしながら、後向きに歩くことはこの子が幼児期か



らやっていたことだったと思い出した。

後向きに歩くとき、自分のゆこうとする目標を背中で直観的に感じているのかとも考えたが、そうではないらしい。小学校六年生になったこの子は、食堂にゆくときも半分大人に手をひかれて道路を歩くが、どこにゆくかという目標意識ははっきりしていない。大人が目標へと誘導してゆく。

手短かにいうならば、この子は目で目標をきめて歩くのではなくて、足もとの触運動感で位置をきめて歩いているのではないかと思われる。その足もとの空間が安定していれば、全体が安定するが、突然足を踏みはずすと、この子の世界全体が不安定になり、よりかかる大人を求める。こんなことを母親に話したら、この子はどこにいても、階段を上り下りすると、新しい場所でも安定するんですと語ってくれた。この子の生活している世界は、身体が直接にふれる空間と考えていいようである。

○食物を手で払う

この子に食物を食べさせるときも、スプーンを口もとにふれるようにすると口をあけて食べる。このごろスプーンの食物をみると、やたらに手をふりまわし、うっかりするとスプーンや皿が数メートル先までとんでしまう。だからレストランの食堂で大変に気をつかう。はじめは食べたくないから食物を手で払うのかと思ったが、丁度赤ん坊が物に手を伸ばしてつかむようになる前に、うまく目的物に到達しないでやたらに手をふりまわすとき

に似ている。多分、これから自分の手で食物を口にに入れて食べるようになるのだらうと思われるが、体も大きく力も強いから、それができる環境をつくるのは容易でないだらう。

○求める心

この子はいま、明瞭に認識されてはいないが身体の触運動感覚での求める心が生まれつつあるように思われる。一日、道路を歩いて売店のある広場にいった。この子は売店の中を私の手をひいて歩きまわったので、私は周囲を気にしてすぐに戸外の広場に連れ出し、数十メートル離れた駐車場まで誘っていった。すぐにこの子は後向きに駐車場の縁石に沿って一周し、後向きのまま階段をのぼって広場にゆき、直ちに売店の中に入っていた。薄暗い内部を壁に沿って私の手をひき、後向きで歩きまわり、更に暗い更衣室の中で立ち止まり静かにあたりを見回すと、この子はすっかり落着いた。売店の椅子で私の膝に坐ったかと思うと数分まどろんだ。あとできくと朝軽い発作があったそうで、この子は薄暗い内部の空間を欲していたのだと思われる。求めることがあったとき、ただ機嫌がわるくなるだけではなく、後向きのまま売店までもどったことを考えると、身体運動感覚の水準での漠然とした目標意識があると考えられる。まだその途中なのだが、ここまで至ったのは、この育てにくい子どもが少しでも快く生きられるようにともちこたえてきた、長い年月にわたる家庭と学校の生活が背景にある。この小旅行のひとつもその中の一日で、あと何年かの後にはこの子の目標意識はもっと明瞭になるだらうし、そうなったときには、

身体運動感覚の水準での目標意識をもちはじめたこの時期のことは忘れ去られてしまいうに
違いない。

後向きに歩くということから、ひとりの子どもの身体運動感覚の世界とそのひろがりにつ
いて述べた。一緒に手をつないで歩きながら、私が当然と思っているのとは違った世界
に住んでいる子どもが厳然として眼前にいることをあらためて知らされる。以下に述べる
ことは、この子の世界とは別に、このことから私が考えることである。

生活の流れ

ここに述べたような子どもを、食事、就寝など日常の生活の流れに誘うのはしばしば容
易でない。毎日を子どもと生活を共にしている母親や保育者は、子どもの小さな自発的行
為を見逃さず、子ども自身が欲したのであるかのように大人の目標にさそう。こうして大
人も自分のやり方を変えながら、子どもとの間で一緒に日常生活をすすめる仕方をつくり
上げている。私はこれはいせつなことだと思う。子どもは気付かぬうちに母親の生活に
ひきこまれて、生活人となっている。

普通には、子どもは幼児期から児童期のうちに、ともかくも大人と共通の日常生活の流
れをつくってゆく。

そうなると、母親は、日常の生活圏をこえて、社会人としての自分の目標を子どもに対
して設定するようになる。いい学校にいれたい、いい点数をとらせたい、いい会社にいれ

たいというような。この段階に至ると、母親の目標と子どもの目標とが著しくずれてくる。子どもには子どもの能動性から生まれる目標があり、そこではこの両者はもはや混同されてはならない。大人にとってどんなに高尚な目標であっても、子どもが自分で選びとらない限り、子ども自身の目標とはならない。そして、大人には思いもよらない世界が、傍で生きている子どもの中にもいつも開けているのだ。この他者の異質性を認めた大人と子どもとの関係が、生活の流れをも、よりよくつくってゆくのだと思う。

教育の目標

前方の目標に向かって歩くことは大人にとっては当然でも、そうなるのには、はいまわり、手でさわって身近な空間に習熟してゆく身体運動感覚の体験が前提になっている。その点からいうならば、ここに述べた子どもの世界は異常ではない。だれでもが通る道をつくりと長い時間をかけてやっているにほかならない。どちらにゆくのかも分からない手さぐりの体験の中から、自分にも他人にも必要なことが次第に見えてくる。

保育の実践を考えても、毎年それをくり返している。今年の四月から夏休みまで、私は新しい子どもたちをかかえて、クラスのそれぞれの子どものことがわかるのに手さぐりのような時期を過ごした。そして次第にひとりひとりの子どもの成長のために必要なことが明瞭になってきた。その期間を経ないで四月のはじめに教育目標を立てることなど不可能なことだし、無理にそうしたら大人の一方的な目標になってしまうだろう。教育目標を持

たなければ教師とはいえないと、戦後四十年間いわれつづけてきたが、その前提としての教師と子どもとの関係をつくり上げる混沌の期間があまりに無視されていたのではないだろうか。子どもが自らのアイデンティティをつくるのを助けるのが教育なのだから、教師の目標と子どもの目標とは当然違うのである。それぞれの子どもが日々を生きる足もとの目標を見つけ、それを実現できるようにするのが教育である。教師の目標に向かって子どもを一直線に進ませようとしたら、子どもは自分自身が何であるのか分からなくなってしまうだろう。

遠い目標は、人間と物事の本質につながるものでなければならぬ。日日の生活の多くの部分は手さぐりの労苦である。それが遠い目標とどのように結びつくのかは、日日にあっては明らかでない。その毎日を充実させ深めるところから、着実な目標が生み出される。「一日の苦労は一日にて足れり」というのは、目標と直線的に結びつくことによって一日は価値を生ずるのではなく、手さぐりの労苦の一日自体に意味があることを述べているではなからうか。

(愛育養護学校)